

東直子著

『短歌の時間』

(春陽堂書店)

まるで、和やかな雰囲気の評評会の中に、ボンと放り込まれたような気分になった。

本書は雑誌「公募ガイド」にて2015年から2021年まで行われた連載「東直子の短歌の時間」をまとめた歌集だ。

79種類のテーマ詠・全711首が収められており、一首ごとに光ったポイントが記載されている。東の柔らかい批評は心地よく、もつともつと、と先を読みたくなくなってくる。背景を含めて読み手はいくつもお気に入り、一首を見つけられるはずだ。

掲載者の中には常連もあり、木下侑介など実際に歌集を出した者もいる。なぜ東がその歌を取り上げたくなるのか、といった選者側の意図などもコラムで取り上げられており、入門書としても読むことができる。

取り上げられているテーマは定番の花鳥風月からバス、休暇、階段など、生活に密着したものまで幅広い。歌歴の浅い初心者の入門書としても、歌歴豊富なベテランが最近のトレンドを掴む上でも、その読みやすさからきつとそばに置きたくなる一冊だ。

(宮 梓一)

今井恵子著

『ふくらむ言葉』

一五五首

(砂子屋書房)

現代短歌の鑑賞

砂子屋書房のホームページに、平日毎日連載の一首鑑賞「日々のクオリア」がある。本書は二〇一七年の一年間、今井氏がそこに執筆したものである。

短歌アンソロジーの鑑賞を読むのは危険が伴う。収録された歌人やその歌が読者にとつて初読であっても、鑑賞の影響を受けることになるからだ。例えば

等伯の松林図けふ観にゆかむ朝の床とについで、『朝の床にきたる雨音』と『朝の床に聞ききたる雨音』。違いは何かといえは、思考が『われ』を中心にめぐるかどうかである。(中略) 雨音が聞こえたら、心を雨音にそわせ、雨音を主人公として世界をつくる。』という今井の鑑賞は、雨の朝のしつとりとした雰囲気静かに広がるこの歌を味わう間もなく的確に指摘してしまう。

では本書の意義は何か。それは読者が作歌や勉強を重ね、作者とどのように読みが重なり、また異なってゆくか。手元に置いて読み直し、その確認をして自身の研鑽に繋げていくことである。(磯川 朋美)

有沢寅歌集

『縦になる』

(短歌研究社)

第五歌集。六十歳を越えたころ、髄膜炎によって首から下を動かせなくなった作者。現在は、口述筆記によって短歌を詠んでいる。ありつた力の生きる力で身構へて母の葬儀へ向かふ車椅子

一人づつ五十人分の挨拶を受ければ言葉でいっぱいになる

真つ直ぐな表現はよく選ばれたものだ。その重みは、いくら想像してもし尽くすことにはない。作者にとつて言葉は、希望のように傍らにあるものだという。コロナ禍では誰にも会えない日々が続いた。

面会も訪問診療も禁止され寂しきことのいよ増されり  
死ぬるまでわれは歌はむ 看護師の密かにくれし水羊羹を  
死ぬるまでは生きねばならぬ定めもち名も知らぬ鳥が蝶を追ひたり

短歌のリズムにのせると、つらいことも生きる喜びとなって与えられる。自らの身体、家族、友、そして神のことを詠む。短歌の力によって、喜びや生が己の中にあつたことを発見しなおす。(中村 恵)